

親友交歡

太宰治

青空文庫

昭和二十一年の九月のはじめに、私は、或る男の訪問を受けた。

この事件は、ほとんど全く、ロマンチックではないし、また、いつこうに、ジャアナリスチックでも無いのであるが、しかし、私の胸に於いて、私の死ぬるまで消し難い痕跡こんせきを残すのではあるまいか、と思われる、そのような妙に、やりきれない事件なのである。

事件。

しかし、やっぱり、事件といつては大袈裟おおげさかも知れない。私は或る男と二人で酒を飲み、別段、喧嘩けんかも何も無く、そうして少くとも外見に於いては和氣藹々わきあいあい裡に別れたというだけの出来事なのである。それでも、私にはどうしても、ゆるがせに出来ぬ重大事のような気がしてならぬのである。

とにかくそれは、見事な男であつた。あつぱれな奴であつた。好いところが一つもみじんも無かつた。

私は昨年罹災りさいして、この津軽の生家に避難して来て、ほとんど毎日、神妙らしく奥の部屋に閉じこもり、時たまこの地方の何々文化会とか、何々同志会とかいうところから講演しに來い、または、座談会に出席せよなどと言われる事があつても、「他にもっと適当な

講師がたくさんいる筈はずです」と答えて断り、こつそりひとりで寝酒など飲んで寝る、というややにせいんしゃ鷹隠者のあけくれにも似たる生活をしているのだけれども、それ以前の十五年間の東京生活に於いては、最下等の居酒屋に出入りして最下等の酒を飲み、所謂いわゆる最下等の人物たちと語り合っていたものであつて、たいていの無頼漢には驚かなくなっているのである。しかし、あの男には呆あきれた。とにかく、ずば抜けていやがつた。

九月のはじめ、私は昼食をすませて、母屋おもやの常居じょいという部屋で、ひとりぼんやり煙草を吸っていたら、野良着姿の大きな親爺おやじが玄関のたたきにのつそり立つて、

「やあ」と言つた。

それがすなわち、問題の「親友」であつたのである。

（私はこの手記に於いて、ひとりの農夫の姿を描き、かれの嫌悪すべき性格を世人に披露ひろうし、以て階級闘争に於ける所謂「反動勢力」に応援せんとする意図などは、全く無いのだという事を、ばからしいけど、念のために言い添えて置きたい。それはこの手記のおしまいまでお読みになつたら、たいていの読者には自明の事で、こんな断り書きは興覚めに違いないのであるが、ちかごろ甚だ頭の悪い、無感覚の者が、しきりに何やら古くさい事を言つて騒ぎ立て、とんでもない結論を投げてよこしたりするので、その頭の古くて悪い

（いや、かえって利口なのかも知れないが）その人たちのために一言、言わでもの説明を
付け加えさせていただく次第なのだ。どだい、この手記にあらわれる彼は、百姓のような
姿をしているけれども、決してあの「イデオロギスト」たちの敬愛の的たる農夫では無い。
彼は実に複雑な男であつた。とにかく私は、あんな男は、はじめて見た。不可解といつて
もいいくらいであつた。私はそこに、人間の新しいタイプをさえ予感した。善い悪いとい
う道徳的な審判を私はそれに対して試みようとしているのでなく、そのような新しいタイ
プの予感を、読者に提供し得たならば、それで私は満足なのである）

彼は私と小学校時代の同級生であつたところの平田だという。

「忘れたか」と言つて、白い歯を出して笑っている。その顔には、幽かすかに見覚えがあつた。

「知っている。あがらないか」私はその日、彼に対してたしかに軽薄な社交家であつた。

彼は、藁わらぞうり草履を脱いで、常居にあがつた。

「久しぶりだなあ」と彼は大声で言う。「何年振りだ？ いや、何十年振りだ？ おい、

二十何年振りだよ。お前がこつちに来ているという事は、前から聞いていたが、なかなか
俺も畑仕事がいそがしくてな、遊びに来れないでいたのだよ。お前もなかなかの酒飲みにな
つたそうじゃないか。うわっはっはっは」

私は苦笑し、お茶を注いで出した。

「お前は俺と喧嘩した事を忘れたか？　しよっちゅう喧嘩をしたものだ」

「そうだったかな」

「そうだったかなじやない。これ見ろ、この手の甲に傷がある。これはお前にひつかかれた傷だ」

私はその差し伸べられた手の甲を熟視したが、それらしい傷跡はどこにも無かった。

「お前の左の向う脛すねにも、たしかに傷がある筈だ。あるだろう？　たしかにある筈だよ。

それは俺がお前に石をぶつつけた時の傷だ。いや、よくお前とは喧嘩をしたものだ」

しかし、私の左の向う脛にも、また、右の向う脛にも、そんな傷は一つも無いのである。

私はただあまいに微笑して、かれの話を傾聴していた。

「ところで、お前に一つ相談があるんだがな。クラス会だ。どうだ、いやか。大いに飲もうじゃないか。出席者が十人として、酒を二斗、これは俺が集める」

「それは悪くないけど、二斗はすこし多くないか」

「いや、多くない。ひとりに二升無くては面白くない」

「しかし、二斗なんてお酒が集まるか？」

「集まらない、かも知れん。わからないが、やってみる。心配するな。しかし、いくら田舎だつてこの頃は酒も安くはないんだから、お前にそこは頼む」

私は心得顔で立ち上り、奥の部屋へ行つて大きい紙幣を五枚持つて来て、

「それじゃ、さきにこれだけあずかつて置いてくれ。あとはまた、あとで」

「待つてくれ」とその紙幣を私に押し戻し、「それは違う。きようは俺は金をもらいに来たのではない。ただ相談に来たのだ。お前の意見を聞きに来たのだ。どうせそれあ、お前からは、千円くらいは出してもらわないといけない事になるだろうが、しかし、きようは相談かたがた、昔の親友の顔を見たくて来たのだ。まあ、いいから、俺にまかせて、そんな金なんか、ひっこめてくれ」

「そうか」私は、紙幣を上衣のポケットに収めた。

「酒は無いのか」と突然かれは言つた。

私はさすがに、かれの顔を見直した。かれも、一瞬、工合いの悪そうな、まぶしそうな顔をしたが、しかし、つつぱった。

「お前のところには、いつでも二升や三升は、あると聞いているんだ。飲ませろ。かかは、いないのか。かかのお酌で一ぱい飲ませろ」

私は立ち上り、

「よし。じゃ、こっちへ来い」

つまらない思いであつた。

私は彼を奥の書齋に案内した。

「散らかつているぜ」

「いや、かまわない。文学者の部屋というのは、みんなこんなものだ。俺も東京にいた頃、いろんな文学者と付き合いがあつたからな」

しかし、私にはとてもそれは信じられなかつた。

「やっぱり、でも、いい部屋だな。さすがに、立派な普請だ。庭の眺めもいい。^{ひいらぎ}柊があるな。柊のいわれを知っているか」

「知らない」

「知らないのか？」と得意になり、「そのいわれは、大にして世界的、小にしては家庭、またお前たちの書く材料になる」

さっぱり言葉が、意味をなして居らぬ。足りないのではないか、ときえ思われた。しかし、そうではなかつた。なかなか、ずるくて達者な一面も、あとで見せてくれたのである。

「なんだろうね、そのいわれは」

にやりと笑って、

「こんど教える。柊のいわれ」ともったい振る。

私は押入れから、半分ほどはいっているウイスキーの角瓶を持ち出し、

「ウイスキーだけど、かまわないか」

「いいとも。かかがいないか。お酌をさせろよ」

永い間、東京に住み、いろんな客を迎えたけれども、私に対してこんな事を言った客は、ひとりも無かった。

「女房は、いない」と私は嘘うそを言った。

「そう言わずに」と彼は、私の言う事などでんで問題にせず、「ここへ呼んで来て、お酌をさせろよ。お前のかかのお酌で一ぱい飲んでみたくてやって来たのだ」

都会の女、あか抜けて愛嬌あいきょうのいい女、そんなのを期待して来たのなら、彼にもお

気の毒だし、女房もみじめだと思った。女房は、都会の女ではあるが、頗すこぶる野暮よぼったい不器量の、そうして何のおあいそも無い女である。私は女房を出すのは気が重かった。

「いいじゃないか。女房のお酌だと、かえって酒がまずくなるよ。このウイスキーは」と

言いながら机の上の茶ちやのみぢやわん 茶碗にウイスキーを注ぎ、「昔なら三流品なんだけど、でも、メチルではないから」

彼はぐつと一息に飲みほし、それからちよつちよつと舌打ちをして、

「まむししょうちゅう 焼酎に似ている」と言つた。

私はさらにまた注いでやりながら、

「でも、あんまりぐいぐいやると、あとで一時に酔いが出て来て、苦しくなるよ」

「へえ？ おかど違いでしょう。俺は東京でサントリイを二本あけた事だつてあるのだ。

このウイスキーは、そうだな、六〇パーセントくらいかな？ まあ、普通だ。たいして強くない」と言つて、またぐいと飲みほす。なんの風情ふぜいも無い。

そうしてこんどは、彼が私に注いでくれて、それからまた彼自身の茶碗にもなみなみと一ぱい注いで、

「もう無い」と言つた。

「ああ、そう」と私は上品なる社交家の如く、心得顔に気軽そうに立ち、またもや押入れからウイスキーを一本取り出し、栓をあける。

彼は平然と首肯して、また飲む。

さすがに私も、少しまいましくなつて来た。私には幼少の頃から浪費の悪癖があり、ものを惜しむという感覚は、（決して自慢にならぬ事だが）普通の人に較べてやや鈍いように思っている。けれども、そのウイスキーは、謂いわば私の秘蔵のものであつたのである。昔なら三流品でも、しかし、いまではたしかに一流品に違いなかつたのである。値段も大いに高いけれども、しかし、それよりも、之これを求める手蔓てづるが、たいへんだつたのである。お金さえ出せば買えるというものでは無かつたのである。私はこのウイスキーを、かなり前にやつとダラスゆづつてもらい、そのために破産したけれども後悔はせず、ちびちび嘗なめて楽しみ、お酒の好きな作家の井伏いふせさんなんかやつて来たら飲んでもらおうとかなり大事にしていたのである。しかし、だんだん無くなつて、その時には、押入れに、二本半しか残つていなかつたのである。

飲ませろ、と言われた時には、あいにく日本酒も何も無かつたので、その残り少なの秘蔵のウイスキーを出したのであるが、しかし、こんなにながぶがぶ鯨飲されとは思つていなかった。甚だケチ臭い愚痴を言うようだが、（いや、はつきり言おう。私はこのウイスキーに関して、ケチである。惜しいのである）まるで何か当然の事のように、大威張りでぐいぐい飲まれては、さすがに、まいまいしい気が起らざるを得なかつたのである。

それにまた、彼の談話たるや、すこしも私の共感をそそってはくれないのである。それ
は何も私が教養ある上品な人物で相手は無学な田舎親爺だからというわけではなかった。
そんな事は、絶対に無い。私は全然無教養な淫売婦いんばいふと、「人生の真実」とでもいったよ
うな事を大まじめで語り合つた経験さえ持つている。無学な老職人に意見せられて涙を
流した事だつてある。私は世に言う「学問」を懷疑さえしている。彼の談話が、少しも私
に快くなかつたのは、たしかに他の理由からである。それは何か。私はそれをここで、二、
三語を用いて断定するよりも、彼のその日のさまざまの言動をそのまま活写し、以て読者
の判断にゆだねたほうが、作者として所謂健康な手段のように思われる。

彼は「俺の東京時代は」という事を、さいしよから、しきりに言っていたが、酔うにし
たがつて、いよいよ頻繁にそれが連発せられて来た。

「お前も、しかし、東京では女でしくじつたが」と大声で言つて、にやりと笑い、「俺だ
つて、実は、東京時代に、あぶないところまでいった事があるんだ。もう少しで、お前と
同じような大しくじりをするところまでいったんだ。本当だよ。じつさい、そこまでいっ
たんだ。しかし、俺は逃げたよ。うん、逃げた。それでも、女というものは、いったん思
い込んだ男を忘れかねると見えるな。うわつはつは。いまでも手紙を寄こすのだよ。うふ

ふ。こないだも、餅を送つてよこした。女は、馬鹿なものだよ、まったく。女に惚^ほれられようとしたら、顔でも駄目だ、金でも駄目だ、氣持だよ、心だよ。じっさい俺も東京時代は、あばれたものだ。考えてみると、あの頃は無論お前も東京にいて、芸者を泣かせたりなんかして遊んでいた筈だが、いちども俺と逢わなかったのは不思議だな。お前は、いつたいあの頃は、おもにどの方面で遊んでいたのだ」

あの頃とは、私には、どの頃かわからない。それに私は東京に於いて、彼の推量の如くそんな、芸者を泣かせたりして遊んだ覚えは一度だつて無い。おもに屋台のヤキトリ屋で、泡盛や焼酎を飲み、管^{くだ}を巻いていたのである。私は東京に於いて、彼の所謂「女で大きくじり」をして、それも一度や二度でない、たび重なる大しくじりばかりして、親兄弟の肩身をせまくさせたけれども、しかし、せめて、これだけは言えると思う、「ただ金のあるにまかせて、色男ぶつて、芸者を泣かせて、やにさがつていたのではない！」みじめなプロテストではあるが、これをさえ私は未だに信じてもらえない立場にいるらしいのを、彼の言葉に依つて知らされ、うんざりした。

しかし、その不愉快は、あながちこの男に依つて、はじめて嘗めさせられたものではなく、東京の文壇の批評家というものの、その他いろいろさまざま、または、友人という形に

なっている人物に依つてさえも嘗めさせられている苦汁であるから、それはもう笑つて聞き流す事も出来るようになっていたのであるが、もう一つ、この百姓姿の男が、何かそれを私の大いなる弱味の如く考えているらしく、それに附け込むという氣配が感ぜられて、そのような彼の心情がどうにも、あさましく、つまらないものに思われた。

しかし、その日は、私は極めて輕薄なる社交家であつた。毅然^{きぜん}たるところが一つも無かつた。なんといったつて、私は、ほとんど無一物の戰災者であつて、妻子を引き連れ、さほど豊かでもないこの町に無理矢理割り込ませてもらつて、以てあやうく露命をつなぐを得ているという身の上に違ひないのであるから、この町の昔からの住民に対しては、いきおい、輕薄なる社交家たらざるを得なかつた。

私は母屋へ行つて水菓子をもらつて来て彼にすすめ、

「たべないか。くだものを食べると、酔いがさめて、また大いに飲めるようになるよ」

私は彼がこの調子で、ぐいぐいウイスキーを飲み、いまに大酔いを発し、乱暴を働かないまでも、前後不覚になつては、始末に困ると思ひ、少し彼を落ちつかせる目的を以て、梨の皮などをむいてすすめたのである。

しかし、彼は酔いを覚ます事は好まない様子で、その水菓子には眼もくれず、ウイスキ

イの茶吞茶碗にだけ手をかける。

「俺は政治はきらいだ」と突如、話題は政治に飛ぶ。「われわれ百姓は、政治なんて何も知らなくていいのだ。実際の俺たちの暮しに、少しでも得になる事をしてくれたら、そっちへつく。それでいいだろう。現物を眼の前に持つて来て、俺たちの手に握らせたなら、そっちへつく。それでいいわけではないか。われわれ百姓には野心は無いんだ。受けた恩は、きつと、それだけかえしてやる。それはもう、われわれ百姓の正直なところだ。進歩党も社会党も、どうだっていいんだ。われわれ百姓は田を作り、畑を耕やしていたら、それでいいのだ」

私は、はじめ、なぜ彼が突如としてこんな妙な事を言い出したのか、わけがわからなかった。けれども、次の言葉で、真意が判明し苦笑した。

「しかし、こないだの選挙では、お前も兄貴のために運動したろう」

「いや、何も、ひとつも、しなかった。この部屋で毎日、自分の仕事をしていた」

「嘘だ。いかにお前が文学者で、政治家でないとしても、そこは人情だ。兄貴のために、大いにやったに違いない。俺はな、学問も何も無い百姓だが、しかし、人情というものを持つている。俺は、政治はきらいだ。野心も何も無い。社会党だの進歩党だのと言ったつ

て、おそれるところは無いと思っっているのだが、しかし、人情は持っている。俺はな、お前の兄貴とは、別に近づきでも何でも無いが、しかし、少くともお前は、俺と同級生でもあり、親友だろう。ここが人情だ。俺は誰にたのまれなくても、お前の兄貴に一票いれた。われわれ百姓は、政治も何も知らなくていい。この、人情一つだけを忘れなければ、それでいいと思うが、どうだ」

その一票が、ウイスキーの権利という事になるのだろうか。あまりにも見え透いて、私はいよいよ興覚めるばかりであった。

しかし、彼だって、なかなか、単純な男ではない。敏感に、ふっと何か察するらしい。

「俺は、しかし何も、お前の兄貴の家来になりたがっている、というわけじゃないんだよ。そんなに、この俺を見下げ果ててもらっては困るよ。お前の家だって、先祖をただせば油売りだったんだ。知っているか。俺は、俺の家の婆から聞いた。油一合買ってくれた人には、飴玉一つ景品としてやったんだ。それが当った。また川向うの斎藤だって、いまこそあんな大地主で威張りかえっているけれども、三代前には、川に流れている柴しばを拾い、それを削くしって串を作り、川からとった雑魚ざこをその串にさして焼いて、一文とか二文とかで売ってもうけたものなんだ。また、大池さんの家なんか、路みちばた傍おけに桶を並べて路行く人に小

便をさせて、その小便が桶一ぱいになると、それを百姓たちに売ってもうけたのが、いまの財産のはじまりだ。金持ちなんて、もとをただせば、皆こんなものだ。俺の一族は、いか、この地方では一ばん古い家柄という事になっているんだ。何でも、祖先は、京都の人で」と言いかけて、さすがに、てれくさそうに、ふふんと笑い、「婆の話だから、あてにはならんが、とにかくちゃんとした系図は在るのだ」

私はまじめに、

「それでは、やはり、公卿くげの出かも知れない」と言つて、彼の虚栄心を満足させてやった。「うん、まあ、それは、はつきりはわからないが、たいてい、その程度のところなのだ。

俺だけはこのな、汚い身なりで毎日、田畑に出ているが、しかし、俺の兄は、お前も知っているだろう、大学を出た。大学の野球の選手で新聞にしょっちゅう名前が出ていたではないか。弟もいま、大学へはいっている。俺は、感ずるところがあつて、百姓になったが、しかし、兄でも弟でも、いまではこの俺に頭があがらん。なにせ、東京は食糧が無いんで、兄は大学を出て課長をしているが、いつも俺に米を送つてよこせという手紙だ。しかし、送るのがたいへんでな。兄が自分で取りに来たら、そうしたら、俺はいくらでも背負わさせてやるんだが、やっぱり東京の役所の課長ともなれば、米を背負いに来るわけにもいか

んならしいな。お前だって、いま何か不自由なものがあつたら、いつでも俺の家へ来い。俺はな、お前に、ただで酒を飲ませてもらうとは思ってないよ。百姓というものは、正直なもんだ。受けた恩は、かならず、きっちりとそれだけ返す。いや、もうお前のお酌では、飲まん！ かかを呼んで来い。かかのお酌でなければ、俺は飲まん！」私は一種奇妙な心持がした。別に私は、そんなに彼に飲ませたいと思ってもいないのに。「もう俺は飲まんよ。かかを連れて来い！ お前が連れて来なければ、俺が行って引っぱって来る。かかは、どこにいるんだ。寢室か？ 寝る部屋か？ 俺は天下の百姓だ。平田一族を知らないかあ」次第に酔って、くだらなく騒ぎ、よろよろと立ち上る。

私は笑いながら、それをなだめて坐らせ、

「よし、そんなら連れて来る。つまらねえ女だよ。いいか」

と言つて女房と子供のいる部屋へ行き、

「おい、昔の小学校時代の親友が遊びに見えてるから、ちよつと挨拶に出てくれ」と、もつともらしい顔をして言いつけた。

私は、やはり、自分の客人を女房にあなどらせたくなかった。自分のところへ来た客人が、それはどんな種類の客人でも、家の者たちにあなどられている気配が少しでも見える

と、私は、つらくてかなわないのだ。

女房は小さいほうの子供を抱いて書齋にはいつて来た。

「このかたは、僕の小学校時代の親友で、平田さんというのだ。小学校時代には、しょっちゅう喧嘩して、このかたの右だか左だかの手の甲に僕のひつ搔^かいた傷跡がまだ残っている、だからきようはその復讐^{ふくしゅう}においてなすつたというわけだ」

「まあ、こわい」と女房は笑って言って、「どうぞよろしく」とていねいにお辞儀をした。私たち夫婦のこんな軽薄きわまる社交的な儀礼も、彼にとってまんざらでもなかったらしく、得意満面で、

「やあ、固苦しい挨拶はごめんだ。奥さん、まあ、こつちへずつと寄ってお酌をしてください」彼もまた、抜けめのない社交家であった。蔭では、かかと呼び、めんと向えば、奥さん、などと言っている。

女房のお酌で、ぐいと飲み、

「奥さん。いまでも、修治（私の幼名）に言っていたのだが、何か不自由なものがあつたら、俺の家へ来なさい。なんでもある。芋でも野菜でも米でも、卵でも、鶏でも。馬肉はどうです、たべますか、俺は馬の皮をはぐのは名人なんだ、たべるなら、取りに来なさい、馬

の脚一本背負わせてかえします。雉^{きじ}はどうです、山鳥のほうがおいしいかな？ 俺は鉄砲撃ちなんだ。鉄砲撃ちの平田といえ、このへんでは、知らない者は無いんだ。お好みに応じて何でも撃つてあげますよ。鴨^{かも}はどうです。鴨なら、あすの朝でも田圃^{たんぼ}へ出て十羽くらいすぐ落して見せる。朝めし前に、五十八羽撃ち落した事さえあるんだ。嘘だと思ふなら、橋のそばの鍛冶屋^{かじや}の笠井三郎のところへ行つて聞いて見ろ。あの男は、俺の事なら何でも知っている。鉄砲撃ちの平田といえ、この地方の若い者は、絶対服従だ。そうだ、あしたの晩、おい文学者、俺と一緒に八幡様の宵宮^{よみや}に行つてみないか。俺が誘いに来る。若い者たちの大喧嘩があるかも知れないのだ。どうもなあ、不穩な形勢なんだ。そこへ俺が飛び込んで行つて、待った！ と言うのだ。ちようど幡随院^{ばんずいゐん}の長兵衛というところだ。俺はもう命も何も惜しくねえ。俺が死んだつて、俺には財産があるんだからな、かかや子供は困る事がない。おい、文学者。あしたの晩は、ぜひ、一緒に行こうじゃないか。俺の偉いところを見せてやる。毎日、こんな奥の部屋でまごまごしていたつて、いい文学は出来ない。大いに経験をひろくしなければいけない。いったい、お前は、どういふものを書いてるのだ。うふふ。芸者小説か。お前は苦勞を知らないから駄目だ。俺はもう、かかを三度とりかえた。あとのかかほど、可愛いもんだ。お前は、どうだ。お前だつて、二人

か！ 三人か！ 奥さん、どうです、修治は、あなたを可愛がるか？ 俺は、これでも東京で暮した事のある男でね」

甚だ、まずい事になって来た。私は女房に、母屋へ行つて何か酒のさかなをもらつて来なさい、と言いつけ、席をはずさせた。

彼は悠然と腰から煙草入れを取り出し、そうして、その煙草入れに附属した巾著きんちやくの中から、ホクチのはいつている小箱だの火打石だのを出し、カチカチやつて煙管きせるに火をつけようとするのだが、なかなかつかない。

「煙草は、ここにたくさんあるからこれを吸い給え。煙管は、めんどくさいだろう」

と私が言うと、彼は私のほうを見て、にやりと笑い、煙草入れをしまい込み、いかにも自慢そうに、

「われわれ百姓は、こんなものを持つているのだよ。お前たちは馬鹿にするだろうが、しかし、便利なものだ。雨の降る中でも、火打石は、カチカチとやりさえすれば火が出る。こんど俺は東京へ行く時、これを持参して銀座のまんなかで、カチカチとやってやろうと思うんだ。お前ももうすぐ東京へ帰るのだろう？ 遊びに行くよ。お前の家は、東京のどこにあるのだ」

「罹災してね、どこへ行ったらいいか、まだきまっていないよ」

「そうか、罹災したのか。はじめて聞いた。それじゃ、いろいろ特配をもらったろう。こないだ罹災者に毛布の配給があつたようだが、俺にくれ」

私はまごついた。彼の真意を解するに苦しんだ。しかし、彼は、まんざら冗談でも無いらしく、しつこくそれを言う。

「くれよ。俺は、ジャンパーを作るのだ。わりにいい毛布らしいじゃないか。くれよ。どこにあるのだ。俺は帰りに持つて行くぞ。これは、俺の流儀でな。ほしいものがあつたら、これ持つて行く！　と言って、もらつてしまう。そのかわり、お前が俺のところへ来たら、お前もそうするとよい。俺は平気だ。何を持つて行つたつて、かまわないよ。俺は、そんな流儀の男だ。礼儀だの何だの、めんどくさい事はきらいなのだ。いいか、毛布は、もらつて行くぞ」

そのたつた一枚の毛布は、女房が宝物のように大事にしているものなのだ。所謂「立派な」家にいま住んでいるから、私たちには何でもあり余っているように、彼に思われているのだろうか。私たちは、不相応の大きい貝殻の中に住んでいるヤドカリのようなもので、すぼりと貝殻から抜け出ると、丸裸のあわれな虫で、夫婦と二人の子供は、特配の毛布と

蚊帳^{かや}をかかえて、うろうろ戸外を這^はいまわらなければならなくなるのだ。家の無い家族の
みじめさは、田舎の家や田畠を持つている人たちにはわかるまい。このたびの戦争で家を
失った人たちの大半は、（きつとそうだと思うのだが）いつか一たびは一家心中という手
段^{のうり}を脳裡に浮べたに違いない。

「毛布は、よせよ」

「ケチだなあ、お前は」

とさらにしつこく、ねばろうとしていた時に、女房はお膳を運んで来た。

「やあ、奥さん」と矛先は、そちらに転じて、「手数をかけるなあ。食うものなんか何も
要りませんから、さあここへ来てお酌をしてください。修治のお酌では、もう飲む気がし
ない。ケチくさくて、いけない。殴ってやろうか。奥さん、俺はね、東京時代にね、ずい
ぶん喧嘩が強かったですよ。柔道もね、ちよつと、やりました。いまだって、こんな、修
治みたいなのは一ひねりですよ。いつでもね、修治があなたに威張ったら、俺に知らせな
さい。思いきりぶん殴ってやりますから。どうです、奥さん、東京にいた時も、こつちへ
来てからも、修治に対して俺ほどこんな無遠慮に親しく口をきける男は無かつたろう。何
せ昔の喧嘩友達だから、修治も俺には、気取る事が出来やしない」

ここに於いて、彼の無遠慮も、あきらかに意識的な努力であつた事を知るに及んで、ますます私は味気無い思いを深くした。ウイスキーをおごらせて大あばれにあばれて来た、と馬鹿な自慢話の種にするつもりなのであろうか。

私は、ふと、木村重成^{しげなり}と茶坊主の話の思い出した。それからまた神崎^{かんざき}与五郎と馬子の話も思い出した。韓信^{かんしん}の股^{また}くぐりさえ思い出した。元来、私は、木村氏でも神崎氏でも、また韓信の場合にしても、その忍耐心に対して感心するよりは、あのひとたちが、それぞれの無頼漢に対して抱いていた無言の底知れぬ軽蔑^{けいべつ}感を考えて、かえってイヤミなキザなものしか感じる事が出来なかつたのである。よく居酒屋の口論などで、ひとりが悲憤してたけり立っているのに、ひとりには余裕ありげに、にやにやして、あたりの人に、「こまつた酒乱さ」と言わぬばかりの色目をつかい、そうして、その激昂^{げつこう}の相手に対し、「いや、わるかつたよ、あやまるよ、お辞儀をします」など言ってるのを見かけることがあるけれども、あれは、まことにイヤミなものである。卑怯^{ひきよう}だと思う。あんな態度に出られたら、悲憤の男はさらに物狂おしくあばれ廻らざるを得ないだろうと思われる。木村氏や神崎氏、または韓信などは、さすがにそんな観衆に対していやらしい色眼をつかい、「わるかつたよ、あやまるよ」の露骨なスタンドプレイを演ずる事なく、堂々と、それこ

そ誠意おもてにあらわれる態の詫^{てい}び方をしたに違いないが、しかし、それにしても、之等の美談は、私のモラルと反撥する。私は、そこに忍耐心というものは感ぜられない。忍耐とは、そんな一時的な、ドラマチックなものでは無いような気がする。アトラスの忍耐、プロメテの忍苦、そのようなかなり永続的な姿であらわされる徳のように思われる。しかも前記三氏の場合、その三偉人はおのおの、その時、奇妙に高い優越感を抱いていたらしい節^{ふし}がほの見えて、あれでは茶坊主でも、馬子でも、ぶん殴りたくなるのも、もつともだと、かえってそれらの無頼漢に同情の心をさえ寄せていたのである。殊に神崎氏の馬子など、念入りに詫^わび証文まで取つてみたが、いっこうに浮かぬ氣持で、それから四、五日いよいよ荒^すんでやけ酒をくらつたであらうと思われる。そのように私は元来、あの美談の偉人の心懷には少しも感服せず、かえって無頼漢どもに對して大いなる同情と共感を抱いていたつもりであつたが、しかし、いま眼前に、この珍客を迎え、従来の私の木村神崎韓信觀に、重大なる訂正をほどこさざるを得なくなつて來たようであつた。

卑怯だつて何だつてかわまない。荒れ馬は避くべし、というモラルに傾きかけて來たのである。忍耐だの何だの、そんな美德について思いをひそめている余裕は無い。私は断言する。木村神崎韓信は、たしかにあのやけくその無頼の徒より弱かつたのだ、圧倒せられ

ていたのだ。勝目が無かったのだ。キリストだって、時われに利あらずと見るや、「かくして主は、のがれ去り給えり」という事になっているではないか。

のがれ去るより他は無い。いまここで、この親友を怒らせ、戸障子をこわすような活劇を演じたら、これは私の家では無し、甚だ穏やかでない事になる。そうでなくても、子供が障子を破り、カーテンを引きちぎり、壁に落書などして、私はいつも冷や冷やしているのだ。ここは何としても、この親友の御機嫌を損じないように努めなければならぬ。あの三氏の伝説は、あれは修身教科書などで、「忍耐」だの、「大勇と小勇」だのという題^{テーマ}でもってあつかわれているから、われら求道^{ぐどう}の人士をこのように深く惑わす事になるのである。私がもし、あの話を修身の教科書に採用するとしたなら、題を「孤独」とするであろう。

私は、いまこそあの三氏の、あの時の孤独感を知った、と思った。

彼の気焰^{きえん}を聞きながら、私はひそかにそのような煩悶^{はんもん}をしているうちに、突如、彼は、「うわあつ！」というすさまじい叫声を發した。

ぎよつとして、彼を見ると、彼は、

「酔つて来たあつ！」と喚^{わめ}き、さながら仁王の如く、不動の如く、眼を固くつむつてうう

むと唸^{うな}つて、両腕^{ひざ}を膝につっぱり、満身の力を發揮して、酔いと闘っている様子である。

酔う筈である。ほとんど彼ひとりで、すでに新しい角瓶の半分以上もやっているのだ。

額には油汗がぎらぎら浮いて、それはまことに金剛あるいは阿修羅^{あしゅら}というような形容を与えるにふさわしい凄まじい姿であった。私たち夫婦はそれを見て、実に不安な視線を交したが、しかし、三十秒後には、彼はけろりとなり、

「やつぱり、ウイスキーはいいな。よく酔う。奥さん、さあお酌をしてくれ。もつとこつちへ来なさいよ。俺はね、どんなに酔っても正気は失わん。きようはお前たちのごちそうになったが、こんどは是非ともお前たちにごちそうする。俺のうちに来いよ。しかし、俺の家には何も無いぞ。鶏は、養つてあるが、あれは絶対につぶすわけにいかん。ただの鶏じゃないのだ。シャモと言つてな、喧嘩をさせる鶏だ。ことしの十一月に、シャモの大試合があつて、その試合に全部出場させるつもりで、ただいま訓練中なんだが、ぶざまな負けかたをしたやつだけをひねりつぶして食うつもりだ。だから、十一月まで待つんだね。まあ、大根の二、三本くらいはあげますよ」だんだん話が小さくなつて来た。「酒も無い、何も無い。だから、こうして飲みに来たんだ。鴨一羽、そのうち、とつたら進呈するがね、しかし、それには条件がある。その鴨を、俺と修治と奥さんと三人で食つて、その時に修

治は、ウイスキーを出して、そうして、その鴨の肉をだな、まずいなんて言ったら承知しねえぞ。こんなまずいもの、なんて言ったら承知しねえ。俺がせっかく苦心して撃ちとつた鴨だ。おいしい、と言つてもらいたい。いいか約束したぞ。おいしい！ うまい！ と言うのだぞ。うわつはつはつは。奥さん、百姓というものはこういうものだ。馬鹿にされたら、もう、縄きれ一本だつて、くれてやるのはいやだ。百姓とつき合うには、こつがある。いいか、奥さん。気取つてはいかん、気取つては。なあに、奥さんだつて、俺のかかと同じ事で、夜になれば、……」

女房は笑いながら、

「子供が奥で泣いているようですから」

と言つて逃げてしまつた。

「いかん！」と彼は呶^ど鳴つて、立ち上り、「お前のかかは、いかん！ 俺のかかは、あんなじゃないよ。俺が行つて、ひっぱつて来る。馬鹿にするな。俺の家庭は、いい家庭なんだ。子供は六人あるが、夫婦円満だぞ。嘘だと思ふなら、橋のそばの鍛冶屋の三郎のところへ行つて聞いてみる。かかの部屋はどこだ。寢室を見せろ。お前たちの寝る部屋を見せろよ」

ああ、このひとたちに大事なウイスキーを飲ませるのは、つまらん事だ！

「よせ、よせ」私も立ち上って、彼の手をとり、さすがに笑えなくなって、「あんな女を相手にするな。久し振りじゃないか。たのしく飲もう」

彼は、どたりと腰を下し、

「お前たちは、夫婦仲が悪いな？　俺はそうにらんだ。へんだぞ。何かある。俺は、そうにらんだ」

にらむもにらまぬも無い。その「へん」な原因は、親友の滅茶な酔い方に在るのだ。

「面白くない。ひとつ歌でもやらかそうか」

と彼が言ったので私は二重に、ほっとした。

一つには、歌に依ってこの当面の気まずさが解消されるだろうという事と、もう一つは、それは私の最後のせめてもの願いであつたのだが、とにかく私はお昼から、そろそろ日が暮れて来るまで五、六時間も、この「全く付き合いの無かった」親友の相手をして、いろいろと彼の話を聞き、そのあいだ、ほんの一瞬たりともこの親友を愛すべき奴だとも、また偉い男だとも思う事が出来ず、このままわかれては、私は永遠にこの男を恐怖と嫌悪の情だけで追憶するようになるだろうと思うと、彼のためにも私のためにもこんなつまらな

い事はない、一つだけでいい、何か楽しくなつかしい思い出になる言動を示してくれ、どうか、わかれ際に、かなしい声で津軽の民謡か何か歌って私を涙ぐませてくれという願望が、彼の歌をやらかそうという動議に依ってむらむらと胸中に湧き起^わって来たのである。

「それあ、いい。ぜひ一つ、たのむ」

それは、もはや、軽薄なる社交辞令ではなかった。私は、しんからそれ一つに期待をかけた。

しかし、その最後のものまで、むざんに裏切られた。

山^{さん}川^{せん}草木うたたあ荒涼

十里血なまあぐさあし新戦場

しかも、後半は忘れたという。

「さ、帰るぞ、俺は。お前のかかには逃げられたし、お前のお酌では酒がまずいし、そろそろ帰るぞ」

私は引きとめなかった。

彼は立ち上って、まじめくさり、

「クラス会は、それじゃ、仕方が無い、俺が奔走してやるからな、後はよろしくたのむよ。きつと、面白いクラス会になると思うんだ。きょうは、ごちそうになったな。ウイスキーは、もらって行く」

それは、覚悟していた。私は、四分の一くらいはいつている角瓶に、彼がまだ茶呑茶碗に飲み残して在るウイスキーを、注ぎ足してやっていると、

「おい、おい。それじゃないよ。ケチな真似をするな。新しいのがもう一本押入れの中にあるだろう」

「知つていやがる」私は戦慄^{せんりつ}し、それから、いつそ痛快になつて笑つた。あつぱれ、というより他は無い。東京にもどこにも、これほどの男はいなかった。

もうこれで、井伏さんが来ても誰が来ても、共にたのしむ事が出来なくなった。私は押入れから最後の一本を取り出して、彼に手渡し、よつぽどこのウイスキーの値段を知らせようかと思つた。それを言つても、彼は平然としているか、または、それじゃ気の毒だから要らないと言うか、ちよつと知りたいと思つたが、やめた。ひとにごちそうして、その値段を言うなど、やっぱり出来なかつた。

「煙草は？」と言ってみた。

「うむ、それも必要だ。俺は煙草のみだからな」

小学校時代の同級生とは言つても、私には、五、六人の本当の親友はあつたけれども、しかし、このひとに就いての記憶はあまり無いのだ。彼だつて、その頃の私に就いての思い出は、そのれいの喧嘩したとかいう事の他には、ほとんど無いのではあるまいか。しかも、たつぷり半日、親友交歓をしたのである。私には、強姦ごうかんという極端な言葉さえ思い浮んだ。

けれども、まだまだこれでおしまいでは無かつたのである。さらに有終の美一点が附加せられた。まことに痛快とも、小気味よしとも言わんかた無い男であつた。玄関まで彼を送つて行き、いよいよわかるる時に、彼は私の耳元で烈はげしく、こゝろこころ囁いた。

「威張るな！」

青空文庫情報

底本：「ヴィヨンの妻」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年12月20日発行

1985（昭和60）年10月30日63刷改版

1996（平成8）年6月20日88版

入力：細渕真弓

校正：細渕紀子

1999年1月1日公開

2009年3月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

親友交歓

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>